



さわやか トカラ情報

〒892-0822
鹿児島市泉町13番13号
TEL099-227-9771

発行
十島村教育委員会

【本物の格好良さ】を求めて！

十島村教育委員会教育長 木戸 浩

私たちは、姿・形の見栄えや人の態度・行動の素晴らしさなどに心ひかれた時に、「格好いい」と表現することがあります。しかし近年、その言葉の使い方に変化が生じているという指摘があります。

「姿・形を立て見栄えがすること」と「力を抜いて適当に取り組むこと」がカッコいいことであり、「汗を流しながら真剣に取り組む姿」や「面倒なことであっても愚直にコツコツと続ける態度・行動」はむしろ、カッコ悪いのだ、ダサいのだと一蹴してしまう傾向が強くなっているというのです。そんな中、村内の学園で見つけた「心ひかれる成長の姿」の幾つかを紹介します。

◇ ロを大きく開けて、体全体を使って声を出し、にこやかに、堂々と！

体育祭・運動会の本番に向けての練習において、校庭の隅々にまで響かせようと声を張り上げ、そして堂々とした仕草や態度の児童生徒。担当教諭のアドバイスや仲間の指摘を素直に受け止め、友達同士で教え合い、がむしゃらに高いレベルを目指している姿は、何となくすがすがしいものです。

◇ 子どもたちの「顔つき」がいい！

「どの子も授業に集中していましたよ。」子どもたちの真剣なまなざしと授業態度に対する称賛です。

“授業中に真剣に学習する”ということは当然そうあるべきことなのですが、ある学園の子どもたちは、以前にも増してどの時間も目が輝いているようです。

顔というものは一朝一夕にはできあがるものではなく、時間(年月)をかけた心の錬磨によって作り上げられるものです。かなり前のことですが、ある新聞の文芸欄に、「人相を作っているのは心だね」という川柳があったことを思い出しました。また、ある著名人の「真剣な顔こそが美しい。」という言葉も脳裏をかすめます。「顔つき」とは、心情を表わす顔の様子であると言われていて、心の有り様によって、良くなれば悪くもなるとまで言われるのです。さて、まずは私自身の顔つきは…？

◇ 教職員も明るく前向き！ ～授業や教育環境づくりへのこだわり～

「〇〇学園の先生たちは、本当によく動かれますよ。」先生が、どの子にもよく声をかけてくださる。島民の方々の声です。子どもと一緒に動き、語り、考え、汗も涙も流し、保護者や地域の方々とも真正面から向き合い、寄せられる声も大事に生かしながら日々の業務に当たっている先生方の姿が、島民の目に留まっているのです。「毎日の授業で勝負」「それぞれが役割を果たし切り、想定を超える成果を」。「目指したい授業、育てたい子ども、創り上げたい学園環境」のイメージを絶えず持ちながら、信念・協働・快活(笑)などの校風づくりに、どの学園も邁進中です。

ノーベル物理学賞受賞者の赤崎勇さん(名城大学名誉教授・南九州市出身・大龍小学校卒業)は、子どもの頃から好きなことにゴツゴツ打ち込む少年だったそうです。「実現は不可能」と言われていた研究を決して途中で諦めず、信念を見失うことなく、ただただ静かにとことん突き詰めていった結果、青色発光ダイオード(LED)の開発に成功されたのです。支えとなったのは、小学校時代の先生の口癖「カンツケ(噛み付け)！」だったのです。「一度噛み付いたら絶対に離すなよ」の意味の口癖だったようです。今年もひたむきに努力され続けた坂口志文特任教授(大阪大)と、北川進特別教授もそれぞれのノーベル賞を受賞されました。

「汗を流しながら真剣に取り組む姿」、面倒なことであっても愚直にコツコツと続ける態度や行動の、ずつと先に、「本物の格好良さ」があることを、この三人の姿(威張らず、自慢せず、感謝の思いを込めた物静かな語り)も証明しています。

「本物の格好良さ」にたどり着く数歩手前には、必ず「心ひかれる成長」の姿があります。そんな姿を数多く生み出せるよう、全ての教職員が、学校組織の一員としての信念を持ち続けながら、本物の指導・教育を追求してほしいと願っています。「見栄えだけを良くすること、適当に取り組むことは決してカッコいいことではない」と、私たち大人が正面から、そして後ろ姿でも教えていくことが大切なのかもしれません。今月末から文化祭・学習発表会。真剣な顔つきと心ひかれる成長を堪能しましょう。

十島村で学ぶ

【魚と僕とロ之島】

ロ之島学園 9年 中尾銀志

ロ之島での生活も今年で3年が経過します。3年前、海と魚を求めて親元を離れ、この小さな島に降り立ったことを今でも思い出します。

僕は島の海や魚とともに成長し、たくさんの貴重な経験をしてきました。

まずは自分のもつ『強み』の再確認です。この島に来てから、毎週のように海へ連れて行ってもらい、魚と出会うことができました。また、寮監さんや先生方からは僕が魚好きであることを認めてもらい、何度も褒めてもらいました。この3年間で改めて、自分の魚好きに自信をもつことができ、『強み』としてこれからは生かしていこうと思いました。

次に、魚の知識の拡大です。小学生の間は、図鑑を見て、魚の名前と姿を覚えることで精一杯でしたが、中学生になり、魚類学に対する考え方が変わりました。細かな分類の仕方や解剖学など、専門的なことを趣味として勉強するようになりました。特に寮生活の中で、自分で魚を捌くことが増え、自分で調べたことと合致することや新たな発見も増え、より一層、魚に対する興味が膨らみました。

僕がここまで好きなものに熱中できるのは、決して自分だけの力ではありません。まずこの島に送り出してくれた家族、生活を支えてくれる寮監さん、僕のことを一番に考えてくれる先生方、僕は何かを達成するたびに、感謝の思いでいっぱいになります。好きなことに一直線で、それでもたくさんの人に感謝できる、そんな人生を魚とともにこれから歩いていきたいです。

トカラマラソン子どもたちの活躍

精一杯の「おもてなし」で、たくさんのランナーを迎えました。



中之島 リサイクル オブジェ



悪石島 見送り



平島 太鼓演奏



宝島 スチールパン演奏

地震でも水道出た

小宝島学園 3年 中村ひなた

十島村小宝島で大きな地震がありました。校舎が大きくゆれて、外にひなんをしました。

その日から、水道から水が出たり出なかったりする日が続きました、お父さんは、役場の出ちょう所や港の船の仕事、水道の仕事をしています。

地震で水道の仕事もいそがしくなり、家にいるときがありません。7日に「しばらく水が出なくなりました。ごきょう力をお願いします」と島の放送がありました。

担任の先生が「今日の給食は袋に入った非常食かもね」と言いました。味はだいじょうぶかなと思いました。

しばらくすると、ろう下の水道から水が出るようになりました。「やったあ。おいしい給食を食べられる」と思いました。

給食はいつもどおりおいしくて最高でした。わたしは、お父さんが水道工事をしてくれたおかげだと思いました。「お父さん、おいしい給食をありがとう」

【小宝島学園からのメッセージ】

小宝島学園 教頭 権藤桐人

月日が経つのは本当に早いもので、私が三度目の離島勤務として小宝島へ赴任してから一年半が経ちました。赴任が決まった際には、これまでに世話になった島の中で一番遠く、また商店やガソリンスタンド等もないと聞いて、不安と期待が半々といった心境だったのを覚えています。そして迎えた出発の日。みしま旅客待合所での辞令交付式が終わった直後に、人生初の「接岸条件」という言葉を耳にしました。接岸できない場合は身一つで隣の島に下船し、高速観光船で渡してもらい、引越しコンテナと乗用車は次の便で届くということでした。「これは、初っ端から大変なことになってしまった。」そう心配する中、奇跡的に接岸することができ、人も積み荷も車も全て、夜明け前の港に降り立つことができました。「まるでこの島が、私たち赴任者を受け入れてくれたみたいだ！」それが小宝島の第一印象でした。赴任の挨拶回りの際には島民の皆さんがロ々に、「この島の子供たちのために遠くから来てくださって、本当に有難い。」「暮らしは多少不便なところはあるけれど、住めばとても良いところ。困ったことがあったら何でも言ってください。」と、言われました。そして実際に生活してみると、この島の人々は誰に対しても温かく接してくれます。もちろん生きていけば人間同士ですから馬の合わない相手もいると思ったのですが、小宝島の老若男女はお互いを尊重し合い、同じ島の一員として、誰一人欠けることなく協力し合いながら生活しています。労りと友愛に満ちた、陽だまりのように温かいコミュニティ。「ここは天国か。」そう思えてきます。私は、この島へ来られた縁に心から感謝しています。そして、この素晴らしい島のために、教頭として微力ながらも最善を尽くしていきたいです。